



◆ 川畠和正 ◆ Butty(バッティ) ～マイストーリー～



いつの頃からか、川畠の“バタ”から“バッティ”と呼ばれるようになっていましたが、バッティとはよくアメリカ映画の中で「ハイ、バディ！？」とグラザーや仲間の意味合いで声をかける時の言葉の英國版らしいと知ったの後になつてから…。このニックネームが気に入っているのは、私のインストラクターとしてのポリシーを言い表しているような気がするからなんです。

幼少期より身体を動かすことが大好きで、朝から晩まで身体を動かして何かをしていろよう子供でした。やんちゃ坊主の御多分に漏れず勉強は大嫌い(笑)。小学校の時の担任の先生がエアロビクスを授業で取り入れるような斬新な先生で、とても感銘を受けたのですが、その影響で体育教員になりたいと思い始めた私。その体育教員になりたいと思う気持ちはその後も色あせることなく、高校卒業後は教員免許の習得出来る短大に入学して専門知識習得の勉強を開始しました。しかし、ようやく自覚するに至ったのですが、どうやら座ったままで長時間何かをするという生活が全く性に合わなかったのです。それは次第に苦痛へと変わって行き、気が付けばつい遊ぶ事に夢中になつてしまつて、自分がいました。1年で習得しなければいけない単位が40あるうち2つしか取れず、結局体育教員への道は諦めざるを得ない状況に…。これは私にとっての明確な挫折体験となって行きます。夢を見失ったまま社会人になつてはみたものの、何とも物足りない日々が続きました。そんな感じの毎日の内で、いつしか暴飲暴食が日常茶飯事となつてしまつており、今思えばそうやって気を紛らわしているしか当時の自分には対処法は見つからなかったのです。

そんなある日、短大の同級生とばったり再会し昔話に花を咲かせていると、当時の運動に対する情熱が自分の中に沸々と湧き上がつてくるのを感じました。「これだっ！これだよ！俺は思いっきり身体を動かしたかったんじゃねえか！！」それからというもの、子供の時のような素直な感覚に身を任せて身体を動かすことが多くなつて行つた自分のスポーツクラブにも通い始めて「本当の自分」が戻つて来ている実感を楽しんでいると、そこで衝撃の出会いをします。そのクラブで開催されていた「カーディオ・キックボクシング・エクササイズ(CKB)」のレッスンに飛び込み、鳥肌が立つような衝撃を覚えたのです。自分中に眠っていた幼少期の気持ちが爆発し完全解放されたことを自覚しました。そのレッスンのインストラクターが、現ジャパン・フィットネス格闘アーツ協会(JFKA)理事長の除村元子師匠でした。アメリカで行われていたCKBを日本に持ち帰つたという情熱ある指導を前にして、自分もこの道でいつの間にか封印してしまつていた自分の本当の思いや熱い思いを爆発させようと、いつしか心に決めていたのでした。

レッスンに来て下さるお客様には、そこへ至つた様々な思いや動機、また身体の状態も含めての異なつた状況というのがあるのですが、こうした要因がフィットネスを通じて少ししづつ変化し、その相乗効果によって改善して行く流れのサポートをするのが私達の役割と言えます。実は私もちょっとした身体的な問題を抱えながら活動を続けていますが、こうした実体験をスポーツのように生かしながら、皆様の現状をより良いものとし、その苦しい状況や悩みを「うまみ」に変えて行けるよう並走させて頂ければ嬉しく思います。英国のスラングで“バッティ”は「サンドイッチ」という意味もあるそうなので、一緒に「おいしい心と身体」を作り上げて行きましょう！そして情熱爆発のお手伝いをさせて下さい。仲間として私が並走し、逆境から不死鳥のように立ち上がるあなたを全力で応援します！



■お客様の声 ■

玉井さん



どこまで続くのか、どこまで進化するのか楽しみにしながら鍛錬しています。

「煌伎匠（おおぎのしょう）」という名前を見て、なんだろうと思い参加を始め、気が付いたら毎週参加したいと思っていました。



「煌伎匠（おおぎのしょう）」という和風の名前に惹かれ

てレッスンを受け始めました。インストラクターが丁寧に

指導してくれる

ので、毎週

レッスンが楽

しみです。形

が決まった時

はスカッとし

ストレス解消

になります！

■お客様の声 ■

M.Sさん(40代)



■理念・ヴィジョン ■



- ▶自分の挫折した体験や状況をシェアしながら、気軽に相談してもらえるインストラクターとなって皆様のサポートさせて頂きます。
- ▶格闘技エクササイズをもっともっと身近に感じてもらえる様に、積極的に発信していきます。
- ▶いくつになっても健康でパワフルに動ける身体作りに長けた知識を身につけ、少しでも多くの方々にFitnessの素晴らしさをお伝えして行けるよう邁進します。
- ▶格闘系エクササイズが、誰でも気軽に参加できる「より身近なもの」となつてゆくように、また老若男女問わず健康な生活を維持する上で大切で欠かせないものとなってゆくように、心を込めて日々の指導にあたると同時に、社会的な認知度を上げてゆくための活動にも力を注ぎます。

